

トマス・アクィナスにおけるアナロギアの 整合的理解の可能性について

内山 真 莉 子

序

アナロギアとは或るものどもの間に類を超越した部分的な共通性が見出される場合に用いられる概念である。そしてそれが或る一つの「名」に関する場面になると「複数のものについてアナロギア的に語られるすべての名において、すべての名は一つのものに対する関係によって語られなければならない」¹⁾とされ、それはしばしばトマスによって一義性と異義性の中間として位置づけられる。こうしたアナロギアは神への述語付けを可能にする根拠となるものであり、トマスの思想においても重要な位置を占めると思われる。しかしながらその重要性とは裏腹に、トマスのアナロギアに対する解釈の定説は未だにない。むしろ今日では、発展史的理解や、理論的体系性の不在ということまでもが唱えられている。

アナロギアは、上述のように、確かに言語学的な要素を含んだ概念ではあるが、同時に神と被造物である我々を何らかの類似を通じて繋ぎとめるものでもある。つまりそれは被造物よりも卓越した完全性を有する原因たる神への秩序を表す存在論的な概念でもあり、トマスにとっては神と被造物がどのように類似していて、どのように類似していないか、その距離感を示すものとして思想の根底にも据えられうるものである。アナロギアをそのように理解するならば、アナロギアの発展史的理解や体系性の欠如という解釈は、このように重要な思想が時とともに移り変

1) Thomas, ST I, q. 13, a. 6 co. (以下使用するテキストについて、『命題集注解』はマンドネ版、『対異教徒大全』および『能力論』はマリエッティ版、その他は全てレオニナ版を用いる。)

わっている、または無秩序に取り扱われていると主張することになりかねず、より慎重な検討が求められる。それゆえ、それらの主張の妥当性を吟味しつつ、トマスにおいてアナロギアは整合的な体系性を保持しており、それは初期から一貫しているということを提示する意義は、未だ残されているように思われる。

以上のような見地から、本稿はトマスの複数の著作において散見されるアナロギアに関する記述が終始一貫し、かつ整合的であることを示すことを目的とする。そこには解決すべき二つの問題が控えている。一つは、その後の著作では二種類となっているアナロギアの種類が、初期著作である『命題集注解』（以下 SS）第 1 巻第 19 区分第 5 問第 2 項においてのみ三種類となっていることを、どのように理解すればいいのかということであり、もう一つには、アナロギアに関する諸々の記述の中で特異点とされることの多い『真理論』（以下 QV）第 2 問第 11 項における「比例性」proportionalitas をどのように扱うのか、ということである。これらの問いに答えることで、トマスのアナロギアに対する新たな見地を導き出したい。

1. トマスのアナロギア解釈における問題点

先ずはトマスによってアナロギアの説明がなされている代表的な箇所を以下に列記し、その記述が一見すると一貫性のないもののように思われることを確認する。

1.1 『命題集注解』第 1 巻第 19 区分第 5 問第 2 項第 1 異論解答

ここは、「全てのものは、非被造の、または第一の真理であるところの一つの真理によって、真であるか」が問われている箇所である。トマスは以下のように異論に解答する。

それゆえ以下のように言われなければならない。あるものがアナロギアに従って言われるのに三通りある。

一つには、概念のみに即し存在には即さない場合である。これは一つの概念が複数のものに対してより先にかより後に関係するが、当の概念が存在を有するのは一つのものにおいてのみという場合で

ある。例えば健康という概念は、動物・尿・食事に対してそれぞれ異なった仕方です、すなわちより先かより後かに従って関係する。しかし健康の存在は動物においてのみあるので、異なる存在に従っては関係しないようにである。

二つ目は、存在に即すが概念には即さない場合である。これはちょうどあらゆる物体が物体性という概念において等しくされるように、複数のものがある共通の概念において等しくされるが、その共通なものも、全てのものにおいて一つの性格に属する存在をもつわけではない場合に当てはまる。(中略)しかし可滅的な物体と不可滅的な物体において、物体の本性の存在が同じ性格に関わることはない。(中略)この物体という名もそうだがその他のものも、可滅的な物体と不可滅的な物体について一義的には言われない。

三つ目は、概念に即し、また存在にも即する場合である。これはちょうど有が実体と附帯性について言われるように、共通の概念において等しくされるのでもなく、共通の存在において等しくされるのでもない場合である。そして実体と附帯性については、両者各々において、それについて言われるところの何らかの存在(有)を、共通の本性(有性)が保っているのだが、その本性は完全性の大小の性格に従って異ならなければならない。それと同じようにして、真理、善性、あらゆるそうしたものが、神と被造物についてアナロギア的に言われると、わたしは述べるのである。ゆえに神のうちにあるところの全てのものは、神の存在に即してあり、被造物のうちにあるところのものは、完全性の大小の性格に即してあるの
なければならない²⁾。(() 内は引用者による補足)

ここではアナロギアに従って言われることが三通りに分類されており、最後の三つ目が、神と被造物とに何らかのことが言われる際に当てはまる仕方であるとされている。これを踏まえた上で、以降の著作における記述内容も見ていきたい。

2) Thomas, SS I, d. 19, q. 5, a. 2, ad 1.

1.2 『真理論』第2問第11項主文

ここでは、「知は神と被造物とに、純粋に異義的に語られるか」が問われており、トマスは純粋に異義的ではなく、アナログ的に語られると解答する。

それゆえ以下のように言われなければならない。神の知と我々の知について「知」という名は、全くもって一義的には言われず、かといって純粋に異義的に言われるのでもなく、むしろアナログに従って言われるのであり、それは言葉としては「比に従って」ということに他ならない。ところで、比に従った合致は二通りにありえ、この二通りに即してアナログの共通性は生じる。

一つには、限定された隔たり、もしくはその他の関係を互いに有することによって、それぞれに比が属するところの比自体の間に何らかの合致がある場合である。例えば、2が1の2倍の量であるために、2と1の間に何らかの合致があるようにである。もう一つには、比であるところの二つのものの間の相互ではなく、むしろ二つの比相互に、合致がある場合である。例えば、6が3の2倍であるのと同様に、4が2の2倍であるということに基づいて、6が4と合致するようにである。

従って、一つ目が比の合致であり、一方二つ目が比例性の合致である。またここから、一つ目の合致の仕方に従えば、それらのうちの一方が他方への関係を有するところの二つのものについて、何がアナログ的に言われるのを我々は見出す。例えば「有」が実体と附帯性について、附帯性が実体に対してもつ関係から言われたり、また「健康」が尿と動物について、尿が動物の健康性に対して何らかの関係をもつがゆえに言われるようにである。一方で、あるものが、二つ目の合致の仕方に従ってアナログ的に言われる場合もある。例えば視覚が目のうちに存在するのと同じように知性が精神のうちに存在するがゆえに、「見ること」という名が身体的な視覚と知性について言われるようにである。(中略) それゆえ後者の仕方(二つ目の仕方)に従えば、神と被造物について何らかの名がアナログ的に語られるのを何ものも妨げない³⁾。(()内は引用者に

よる補足)

ここではアナロギアは二通りに分類されている。分類の数が異なり、かつ「比の合致」や「比例性の合致」という新たな概念を用いているという点で、SS 該当箇所における記述と違いが生じている。また SS において神と被造物とに何か語られる際の仕方と同じ仕方であるとされていた実体と附帯性と言われる「有」の例が、QV のこの箇所では神と被造物との場合にはあてはまらなるとされている。こうしたことから両者の記述は言葉上、一見すると一貫性に欠けている。

1.3 『対異教徒大全』第1巻第34章

『対異教徒大全』(以下 SG) の箇所は、神と被造物と言われる名は、一義的ではなく、しかし純粋に異義的にでもないとした上で、「神と被造物と言われる名はアナロギア的に語られる」ことを述べている箇所である。

よって、述べてきたことから残るのは、神と他の諸事物について言われるところのものは一義的にでも異義的にでもなく、むしろアナロギア的に述語付けられる、ということである。これは一つのものからあるものへの秩序ないし関係に即してある。実際、アナロギア的に言われるということは二通りある。

一つには、多くのものがある一つのものへの関係を有することに即して、である。例えば一つの〈健康性〉への関係に即して、動物は健康の基体として「健康」と言われ、薬は健康を作出し得るものとして「健康」と言われ、食事は健康を保ちうるものとして「健康」と言われ、尿は健康の徴として「健康」と言われるようにである。他方では、別のあるものではなく、むしろそれらの一方に向かう二つもの両者に含まれる秩序、ないし関係に即して、である。例えば、実体と附帯性について「有」は言われるが、それは附帯性が実体に対する関係を有することに即してであり、実体と附帯性が

3) Thomas, QV, q. 2, a. 11, co.

ある三つ目のものに関係付けられることに即す訳ではないようにである。それゆえ、神と他の被造物について同じように言われる名は、一つ目の仕方に即してアナログア的には言われない。というのもその際には、あるものが神より先にあらねばならなかっただろうが、二つ目の仕方ではそのようなことはないからである⁴⁾。

ここでは、先の QV と分類の数としては二通りと共通しているが、説明内容が異なっている。「比」や「比例性」という言葉は用いられず、ここでは「多くのものが一つのものに関係する」（以下「一対多関係」）のか、「一方が他方に関係する」（以下「一対一関係」）のか、という観点で分類されている。そして後者の一対一関係が神と被造物とに当てはまる仕方だとされているが、その具体例は実体と附帯性との「有」である。この点でも QV とは内容的に齟齬をきたしているように思われる。

1.4 『神学大全』第 1 部第 13 問第 5 項主文

『神学大全』（以下 ST）は、「神と被造物について言われる名は、それらに一義的に言われるか」ということが問われている箇所である。

このような諸々の名（知恵あるもの、のような名）は、神と被造物についてアナログアに従って、すなわち比に従って言われる。このことは名において二通りの仕方で生じる。

一つには、多くのものが一つのものへの比を有するからであり、ちょうど「健康」が薬と尿について、各々が動物の健康性に対する秩序、ないし比——後者（尿）は徴、前者（薬）は原因である——を有する限りで言われるようにである。もう一つは、一方が他方への比を有するからであり、ちょうど「健康」が薬と動物について、薬が動物においてある健康性の原因である限りで言われるようにである。そしてこの後者の仕方によって、あるものは神と被造物について、アナログア的に言われるのであって、純粹に異義的ではなく、一義的にでもない。実際、我々は被造物からでなければ神を名

4) Thomas, SG I, cap. 34.

付けることはできないのであり、これは既述のことである。このように、何であれ神と被造物とに言われるもの（名）は、そこにおいてあらゆる事物の完全性が卓越した仕方では先在する、根源または原因としての神に対する被造物の何らかの秩序がある限りで言われるのである。そしてこの共通性のあり方は、純粋な異義性と単純な一義性の中間にある⁵⁾。（（ ）内は引用者による補足）

この記述は、先のSGにおける記述と類似しているのが見てとれる。分類の仕方は二通りであり、それぞれ「一対多関係」と「一対一関係」となっている。そして何らかの事柄が神と被造物とにアナロギア的に言われるのは、二つ目の「一対一関係」に基づくことも明示されている。唯一異なる点は、具体例として、STにおいては両方共に「健康」が用いられているということである。

	分類数	分類の仕方	神と被造物に適合する仕方
SS	3	概念／存在／概念と存在	概念と存在
QV	2	比の合致／比例性の合致	比例性の合致
SG	2	一対多関係／一対一関係	一対一関係
ST	2	一対多関係／一対一関係	一対一関係

以上までの各著作の内容を、その要点をしぼってまとめるならば以下のようなになる。

ここから明らかなように、記述内容の整合性を確認する上で特に問題となるのは、SSとQVでの記述をどのように扱うか、ということである。それぞれ分類の数の違いと、分類の仕方が特有であるという点で、他の二つの著作とは大きく異なっている。これらを整合的に解釈することを目標としつつ、続いては、こうした記述内容の違いを元にトマスにおけるアナロギア思想の発展性を主張する先行研究を取り上げる。

5) Thomas, *ST* I, q. 13, a. 5, co.

2. 発展史的理解を説く立場に対して

2.1 Montagnes による主張

Montagnes は、*QV*におけるトマスのアナロギアは「暫定的な解答」⁶⁾であると主張する。その上で、*QV*より後の著作でトマスが神と被造物とに当てはまるアナロギアとして主張しているのは、一貫して一対一関係に基づくものであり、*QV*の中で見られるような比例性の合致に基づく四項関係ではないことを根拠とし⁷⁾、「比例性」の思想はアナロギアの場面から破棄されたと述べている。そうすることで *QV*より後の著作では形相的な因果関係に留まらず、作出的な因果関係⁸⁾を神と被造物との間に措定できるようになったと主張する。以下に Montagnes の記述を引用する。

それでは何故トマスは『真理論』での解答を破棄したのか。恐らくは、その解答が提示する不都合さのゆえである。というのも、その解答は、神を不可知にしてしまうのを承知の上で、存在するものと神との間に裂け目を生じさせてしまうからである。(中略) 形相的な原因性とは異なり、作出的な原因性は存在するものと神との間にある関係を打ち立て、それによって神は、超越していることを損なうこと無く、最も本質的な仕方ですべてのものへと現前する。形而上学的な観点の変化、すなわち原因性と存在に関するある考えは、トマス自身が最終的に関わるところの解決を意のままに提示する。存在するものと神との間には、ある「一対他方」のアナロギアが存するのである⁹⁾。

6) Montagnes, B., *La doctrine de l'analogie de l'être d'après Saint Thomas D'Aquin*, Louvain: Publications Universitaires, 1963, p.67.

7) 一対一関係とは先に見たように SG や ST で述べられていたものであり、四項関係とは $3:6=4:8$ という関係である。確かに *QV*より後の著作でこうした四項関係は明示的には登場しない。

8) 形相的な因果関係とは、概念的な関係であり、このことを Montagnes は一義的な因果関係だと理解している。それに対し作出的な因果関係とは、神が被造物を創造したという実在的なレベルでの因果関係に基づくものであり、これを Montagnes は異義的な因果関係と理解する。Cf. Montagnes (1963), pp.91-92.

9) Montagnes (1963), p.93.

Montagnes はこのようにして、*QV*より後の著作で主に述べられる「一対他方」の関係（すなわち、一対一関係）こそが、神と被造物との間のアナロギアとしてトマスが最終的に保持するものであり、そこでもはや *QV*における「比例性」は必要とされないと主張するのである。しかし、Montagnes がトマスによる最終的な解答だとする「一対他方」の関係と、*QV*における「比例性」とは、互いに背反する事柄であるかどうかは、検討の余地があると思われる。というのも、Montagnes は「比例性」を単に、形相的な同一関係（一義的關係）を否定するものと解釈していると思われるが¹⁰⁾、果たしてそのようにのみ理解されるものであるかどうかは、疑問に付されるべきだからだ。また、トマスは「一対他方」の関係を主張することで、神と被造物との間にある、「創造」という直接的な作動的因果関係のみを強調したかったのであろうか、という点についても一考の余地があるだろう。

2.2 Klubertanz による主張

Klubertanz も Montagnes と同じく *QV*の特異性を認め、その後の著作での記述内容とは異なっていることを主張する立場である。実際に、以下のように述べている。

1256年あたりの数ヶ月間、聖トマスは固有な比例性をいわゆる内的なアナロギアとして、神と被造物との間にある存在論的な類似を説明するものだと考えていた、もしくは考えようとしていた。この立場は、彼がそれ以前には有していなかったし、その後の著作において決して再び発展させようと思わなかったものである。それゆえ固有な比例性とは、彼の経歴の中で初期のある期間にトマスによって示されていた教えという意味で、或るトマスのアナロギアである¹¹⁾。

これは、*QV*より後の著作において用いられている「比例性」という

10) Ibid., pp. 79-90.

11) Klubertanz, G. P., *St. Thomas Aquinas on Analogy. A Textual Analysis and Systematic Synthesis*, Chicago: Loyola University Press, 1960, p. 94.

言葉が、QVで言われていたような神と被造物との間において見られる、共通の完全性が分有されているということに基づく内的な類似性を表すもの（このことを Klubertanz は「固有の比例性」と述べる）ではなくなっている、ということを根拠として主張されている。QVより後の著作において見られる「比例性」を Klubertanz は「アリストテレス的比例性」と称するのであるが、それらは単に何らかの機能、または関係が類似していることを説明しているのみであると解釈する。例えば『形而上学注解』において、見る力が見る能力に関係するように、聞く力は聞く能力に関係すると述べられている箇所について、以下のように述べる。

同様にしてこれらの比例性も、少なくとも直接的には、何ら存在論的な類比を表現していないように思われる。働き、ないし対象と一致する二つの作用的な力の比較は、共通的な完全性を説明してはいない（少なくとも明確に共通な一つの完全性といったものはない）。それは、通常ならば一義的であり、ただ稀にアナログ的であるような関係を述べているのであって、ある一義的に共通な完全性を暗に示しているように思われる¹²⁾。

しかしながら、こうした解釈にも疑問の余地はある。それは、トマスは「比例性」という概念をアナログアの場面で導入することで、Klubertanz が言うような「共通の完全性に基づく内的な分有関係」を主張しようとしていたのか、という点においてである。これは先の Montagnes における疑問点とも関連する。つまり問題とされるべきは、「何らかの事柄が神と被造物にアナログ的に言われる」という場面において、その共通性の根拠として強調されるのは、彼らが理解するような作出因的分有関係であるのか、ということである。これが肯定されるならば、両者の主張の妥当性は認められうるであろう。この点に関して、以下にて考察を続けたい。

12) Ibid., p. 84.

2.3 両者への応答——作出因的分有関係と比例性とアナロギア

アナロギア的に述語付けられるものどもは、類を超越した何らかの共通性に基づき、それぞれ何らかの関係を有している。例えば「動物の健康」に対して薬が有する関係は、その健康を作出するというものであり、実体と附帯性と言われる「有」においては、実体は附帯性の原因であるという関係にあり、附帯性に先だって「有」と言われると述べられている¹³⁾。これらは概ね「原因と原因されたもの」という自然的な因果関係において、原因と結果の何らかの合致ないし類似があることに基づいている¹⁴⁾。

では、神と被造物の場合ではどうか。確かにアナロギアが語られている場面でも、「神からこうした完全性が被造物へと流出する」¹⁵⁾や、「分有された被造物における形相自体は、神であるところの形相の性格を欠いている」¹⁶⁾というように、神から被造物への存在、完全性の流出や、それを分有という仕方と受ける被造物といった、作出因的な因果関係を含意する記述は散見される。実際、被造物という結果に由来する名が神においてより先に言われるのは、神が作出因であり被造物はその完全性を分有するのみであるという関係があるからに他ならず、作出因の関係がアナロギアにおいても前提とされていることに疑いはない。しかしながら、神と被造物という作出因の関係に基づく原因と結果が、合致ないし類似する¹⁷⁾際には、先に挙げた「健康」や「有」とは異なる様態になる。何故なら、神は被造物の自然的な作出因ではなく、意志的な作出因であるからだ¹⁸⁾。意志的な原因とその結果が合致する仕方について、トマスは以下のように述べる。

13) Thomas, *SG I*, cap. 34.

14) Cf. Thomas, *Quaestiones disputatae de Potentia* (以下 *QP*), q. 7, a. 7, co. 「原因されたものは、いくら原因に類似しているものでなければならず、それゆえ原因されたものと原因については、何ものも純粋に異義的には述語付けされない。」

15) Thomas, *ST I*, q. 13, a. 6, co.

16) Thomas, *QP*, q. 7, a. 7, ad 2.

17) 少なくともアナロギアの文脈においては、合致 *convenientia* と類似 *similitudo* は交換可能なものとして用いられている。“*Duplex est convenientia vel similitudo.*” (Thomas, *SS*, d. 45, q. 1, a. 1, qa. 1, ad 2)

18) Cf. Thomas, *ST I*, q. 14, a. 8, co.; q. 19, a. 4, co.

それゆえ我々の意志の働きは、結果が原因に、また意志が意志に合致するように、神の意志に合致することができる。ところで、結果の原因への合致は、自然的な原因においてと意志的な原因においてでは、別様に見出される。実際、自然的な原因においては、人が人を生み、火が火を生じるように、本性の類似に即して合致が生じる。しかし意志的な原因において、結果が原因に合致すると言われるのは、結果のうちにその原因が実現されることによる。ちょうど、製作者の精神においてある技術と同じ本性があるからではなく、製作物のうちに技術の形相が実現されているから、製作物がその原因に類同化されるようにである。同様にして、意志が秩序づけたものが生じるとき、その意志の結果は意志に合致する。このように、我々が意志するようにと神が意志するところのものを我々が意志することにより、我々の意志の働きは神の意志に合致する¹⁹⁾。

神は被造物の意志的な作出因であるため、神と被造物が原因と結果として合致されると言われる際には、本性の類似に即してではなく、製作物の中に技術の形相が実現されるように、結果のうちに原因の形相が実現されることによる。これに続けて同じ箇所でも、トマスは後者の合致の仕方をさらに細分化する。

ところで、意志の他の意志に対する働きに即した合致は、二通りに生じる。一つには、人が人に似ているというように、種の形相に即すようにしてであり、もう一つには、知恵ある者が知恵ある者に似ているというように、付随した形相に即してである。そして、種に即して類同化されると私が言うのは、そこから働きが形象を引き出すところの、対象における適合がある場合にである。(中略)他方で、働きに付随する形相は、引き出す態勢に伴う様態である。そしてこのようにして、或る人が、神がそうするように、愛徳から意志する場合に、我々の意志は神の意志に合致していると言われるのである。そしてこのことは、形相因に即すようにしてある²⁰⁾。

19) Thomas, *QV*, q. 23, a. 7, co.

つまり、意志的な作出因に対して結果が合致すると言われる際には、種の形相に即しているのか、付随した働きの形相に即しているのかが先ず考察され、その上でさらに、働きの「仕方」における合致があるならば、それは形相因的な合致だとされる。そしてこの「仕方」に即して、すなわち「知性認識の仕方」における合致があるがゆえに、知恵ある者は別の知恵ある者と似ていると言われるのであり、このことが、神と被造物がそれぞれ「知恵ある者」という名で合致することの根拠となるのである。確かに神と被造物は、作出因に基づく因果関係による原因と結果であるが、しかしそれらが「合致する」と言われる場合には、両者は自然的な因果関係に基づくわけではないため、単に作出因という観点によって合致があるのではない。それらはむしろ、作出因の形相因（これは事物の本質を言い表すような内在形相ではなく、むしろ外在する典型的形相を指している²¹⁾）としての側面に基づき合致している。特に神と被造物とにアナロギア的に言われる名として取り上げられることの多い「知恵ある者」という名は、形相に基づく「働きの様態」が神と被造物で類似しているがゆえに（あくまでも被造物が神に類似している、すなわち結果が原因を模倣するのであるが）、両者に合致するのである。

そして「比例性」とは、まさにこうした合致の仕方を説明するものであると考えられる。特に目立って「比例性」が導入された *QV* の該当箇所は、「知は神と被造物とに、純粹に異義的に語られるか」が問われている箇所であり、諸々のアナロギア的な名の中でも、神と被造物の働きに関する名である「知」が主題とされた、ある種限定的な文脈の中にある。それゆえ「知」という名の合致を述べる際には、意志的な原因と

20) Ibid.

21) トマスは神を被造物の第一の範型因であることは認めるが、内在形相としての形相因であることは、当然のごとく認めていない (cf. Thomas, *QV*, q. 27, a. 1, ad 1)。しかし神のうちにあるイデアのことを「範型的形相 *forma exemplaris*」と称したり (Thomas, *ST I*, q. 44, a. 3, co.)、ディオニシウス『神名論』における「神のみが万物の根源、実体、原因である」という記述をカトリックの教えに適うものとして援用し、「根源であるのは作出因として、実体であるのは範型的形相として、原因であるのは目的因として」と述べている (Thomas, *De substantiis separatis*, cap. 18) ことから、外在する形相因という意味でならば、神のことを「形相因」と称することに問題はないと考えているはずであり、本稿もそうした限りの意味で「形相因」という言葉を用いている。Cf. Thomas, *SS III*, d. 27, q. 2, a. 4, qc. 3, ad 1; *QV*, q. 3, a. 1, co.; *QP*, q. 3, a. 8, ad 17.

結果として²²⁾、「働きの様態」が両者において合致していることを示さなければならない。それは「神の意志 = 人の意志」のように直接的かつ同値的に合致するようには表現されず、「神：愛徳から意志するの人の愛徳から意志する」というように、比の類似すなわち「比例性」²³⁾として表現されるのである。

さらに、こうした形相的な模倣に基づく原因と結果の合致、すなわち類似は、人間において「神の似姿」*imago Dei*が見出されるという文脈においても見られる。

さて、人間のうちに、範型としての神から由来する、何らかの神の類似が見出されることは明らかである。しかしその類似は等性に即してあるのではない。何故ならこの範型は、こうした、それを範型としたものを無限に超越するからである。それゆえ人間のうちに神の似姿があると言われもするが、しかし完全な似姿ではなく、むしろ不完全な似姿なのである²⁴⁾。

22) 本稿では神と被造物が「意志的な」原因結果関係であることを強調するが、それは脚注 21 にて示したように、神と被造物との何らかの類似が「範型的形相」という意味での形相因に基づくことによる。実際トマスは *QV, q. 3, a. 1, co.* にて「形相を模倣する」仕方について詳述しており、「範型的形相」ないしアイデアを模倣するのは偶然的ではなく、それに向かって形相付けられているところの秩序に即して、自体的にであると述べる。そして、その模倣に向かって製作者が何らかのものを制作する、製作者の外にある形相も「範型的形相」ないしアイデアと呼び、その定義を「あるものが、その目的を予め決定している能動者の意図に基づき、模倣するところのもの」としている。((...) *quod autem aliquam formam imitatur a casu non dicitur ad illam formari quia ly ad videtur importare ordinem ad finem; unde cum forma exemplaris vel idea sit ad quam formatur aliquid, oportet quod formam exemplarem vel ideam aliquid imitetur per se et non per accidens. (...) dicimus enim formam artis in artifice esse exemplar vel ideam artificiatum, et similiter etiam formam quae est extra artificem ad cuius imitationem artifex aliquid facit. Haec ergo videtur esse ratio ideae, quod idea sit forma quam aliquid imitatur ex intentione agentis qui praedeterminat sibi finem.*) 以上のことから、「範型的形相」を模倣する際には「そのように作ろう」という意図のある製作者、すなわち意志的な製作者が前提とされていると考えられる。そして神と被造物におけるアナログアとは、まさにそうした模倣関係を据えるものであるため、その場面で神は意志的な原因として扱われなければならない。

23) 「比例性」は「比の類似」と言い換えられる。Thomas, *QV, q. 2, a. 3, ad 4*, “est enim proportionalitas similitudo proportionum.”

24) Thomas, *ST I, q. 93, a. 1, co.*

ここで重要になるのは、何らかのものが範型因的な形相としての神に類似したとしても、そのものが神と「等しい」関係にまでは至らない、ということである。トマスはよく「比例性」を説明する際に「 $3 : 6 = 4 : 8$ 」といった数学的な例を用いるが、この「比例性」に基づく関係には「等しさ」が成立している。何故なら両項とも「2倍である」という共通の性質で合致しているからだ。それゆえ「比例性」に即した合致において、原則として「等しい」ことは成立し得る。しかし神と被造物の場合、両者は無限に隔たった存在者であるがゆえに、「等しい」関係は成立せず、「不完全に模倣する」という関係に留まるのである。それにも関わらず、「万物は有である限りで第一の有に類同化し、また生きているものである限りで第一の生命に類同化し、そして知性認識するものである限りで、最高の知恵に類同化する」²⁵⁾と言われる。ゆえに神と被造物との間にある「比例性」は、「等しさ」を含まない関係性でありながら、模倣による合致が成立している関係性であると理解しなくてはならないだろう。

以上のことから、「比例性」は Montagnes が解釈するような、一義的關係を否定するものではなく、意志的な作出因とその結果において両者が「働きの様態」において合致することを示すものだと解釈されるだろう。こうした「比例性」に対する理解は、Klubertanz が *QV* より後の著作で見られる「比例性」を、単に何らかの機能、または関係が類似していることを説明しているのみであって、共通の完全性に基づく内的な分有関係を説明しているのではないと解釈したことへの応答ともなる。そもそも「比例性」は共通の完全性に基づく内的な分有関係を説明するものではなく、むしろ「働きの様態」が形相因的に合致することを示すものなので、*QV* より後の著作においても、そうした意味で「比例性」は正しく用いられていると言えるだろう。例えば、*ST* 第2部第3問第5項第1異論解答には以下のような記述がある。

上述の、神に対する実践的知性の類似性は比例性によってある。それはすなわち、神が自らの認識内容に関わるようにして、実践知性

25) Ibid. a. 2. ad 4.

が自らの認識内容に関係するからである²⁶⁾。

この箇所はまさに、神の認識内容への関わり方（すなわち働き方）と実践知性の認識内容への関わり方（働き方）の類似性は、「比例性」に従ってあるものであると述べている。それゆえ、形相的な類似・合致関係を排した作出因的關係や、共通の完全性に基づく内的な分有関係のみを強調することでアナログア思想を發展史的に理解する Montagnes と Klubertanz の主張は、妥当性に欠けると判断される。

3. 整合的理解のモデル提示

3.1 文脈の整理

3.1.1 『命題集注解』について 続いて、アナログアの整合的理解についての考察に入りたい。先ず一つ目の問題として確認されていたのが、アナログアの種類が他の著作においては二通りであるのに対し、SSにおいてのみ三通りとされていることであった。

これは、該当箇所の文脈に着目することで解決されると思われる。SSの該当箇所は異論解答であり、異論は「全てのものは、非被造の、または第一の真理であるところの一つの真理によって、真である」ことを主張している。それに対しトマスは主文において、全てのものが第一の真理によって真であることを端的には肯定せず、むしろ異論に反して、それぞれ異なる複数の真理があることを主張する。よって、異論解答としては「全てのものは一つの真理によって真となる訳ではなく、違った仕方でも真となる」ことを強調する文脈となるはずだ。すなわち、そこではアナログ的に言われる名の共通性ではなく、むしろそれらの異義性について述べているのだと判断することが出来るのである。

このように理解すると、SSにおいて述べられていた「概念に即して異なる」、「存在に即して異なる」、「概念と存在に即して異なる」という分類が、他の著作においても似たような仕方でも用いられていることが確認される。

26) Thomas, ST I-II, q. 3, a. 5, ad 1.

ところで、こうしたアナロギア的な述語付けにおいて、ある時には名と事物にそれぞれ同じ秩序が帰されるが、他方である時には同じではない。何故なら名の秩序は認識の秩序に随伴するからであり、これは名が可知的懐念の印であるからだ。

それゆえ事物に即して先立ってあるところのものが認識によっても先に見出される時、同じものが名の概念に即しても、事物の本性に即しても先に見出されることになる。(中略)他方で、本性に即しては先立つところのものが、認識に即してはより後である場合、そのときにはアナロギア的な物事において、事物に即してと名の概念に即してとで同じ秩序がある訳ではない²⁷⁾。

ここでは、アナロギア的に述語付けられる名が、概念の秩序と事物の本性の秩序とで異なる場合が分類されている。つまり、「概念に即した」ないし「事物の本性（存在）に即した」分類というのは、名が言われる際の秩序の異なり、すなわちアナロギア的な名における異義性の在り方の違いを分類したものであると解釈できる。

その他の著作の文脈はどうであろうか。QVは「知は神と被造物とに、純粹に異義的に語られるか」が問われている箇所であり、解答は異義的にではなく、アナロギア的にであると述べる。すなわち、純粹に異義的にではない、何らかの共通性があることが述べられている箇所だと判断される。実際「……ところで、比に従った合致は二通りにありえ、この二通りに即してアナロギアの共通性は生じる」と述べられていることから、これは明らかであろう。

SGは、神と被造物とに言われる名は、純粹に異義的に言われるのではないとした上で、それに続く箇所である。そしてそこにおいて、「これは一つのものからあるものへの秩序ないし関係に即してある」と述べられていることから、一つのものへの関係、すなわち一つのものにおける合致がどのようにあるかを説明していると考えられる。同様にしてSTにおいても、「この共通性のあり方は、純粹な異義性と単純な一義性の中間にある」と述べられていることから、共通性、合致を強調して

27) Thomas, SG I, cap. 34.

いる文脈だと判断される。

それゆえ、問題とされていた SS の該当箇所のみが、アナログ的に名付けられるものどもにおける異義性を強調点として書かれた文章である、ということになる。異義性に強調点を置くか、共通性に強調点を置くかでは、その説明の仕方は当然異なるべきである。このようにして、SS における分類の数と説明方法の違いという問題は解決されるであろう。

3.1.2 『真理論』について アナログアの整合的解釈において、もう一つの問題点として確認されていたのが、QV における「比の一致」、
「比例性の一致」という分類方法の特異性であった。

しかしこれについては、先述した「比例性」についての考察から容易に解答は引き出されると思われる。アナログアの「比例性」とは自然的な原因とは異なる、意志的な原因とその結果において、両者が「働きの様態」等において合致することを示すものであった。そして何故 QV において、特別目立つ仕方でそれが導入されなければならなかったのかと言えば、そこで問われているものが「知」という名であり、それは働きに随伴するものであるという点で、より特殊な文脈であったからである。

アナログ的な名の中でもより特殊なものであるがゆえに、それは「健康」や「有」とも異なるとされるのであるが、それはより分類が厳密になったためであり、それ以降の SG や ST におけるそれとは相容れないものであると考えるべきではないだろう。何故なら、QV においても、SG や ST での記述と同様に、神と被造物との間にあるアナログアは「一対多関係」ではないことは述べられているからである。

ある二つのものが一つのを分有することによって、または、それによって一方から他方を知性によって把握することができるような限定的な関係を、一方が他方に対し有することによって生じる類似は、隔たりを縮める。しかし比の合致（比例性）によってある類似はそうではない（距離を縮めない）。（中略）それゆえ神に対する被造物の無限の隔たりは、上記の（比例性による）類似を取り除く

ことはない²⁸⁾。(() 内は引用者による補足)

「ある二つのものが一つのものを分有することによって」ある関係とはすなわち「一対多関係」である。そしてこの関係に基づく類似は隔たりを縮めるがゆえに神と被造物には当てはまらない。しかし同時に、「一方から他方を知性によって把握できるような関係」すなわち「一対一関係」も、神と被造物には当てはまらなるとされているようにも思えるが、これは「一対一関係」にも、自然的な因果関係と意志的な因果関係があることを意味していると解釈できる。つまり *QV* 該当箇所、およびその近辺にて行われているアナロギアの種類は、「一対一関係」の下位区分に特化していると考えられる。同じ「一対一関係」といっても、その一対一の関わり方が多様にあることは受け入れられることであり、実際に自然的な原因と意志的な原因では異なることからそれは明らかである。*QV* の該当箇所は、神と被造物とに言われる「知」という、ある種特殊な名が主題とされたために、*SG* や *ST* よりも厳密な分類となったと解釈される。このような解釈によれば、*QV* における分類方法の特異性も、他の著作の文脈と整合的に読むことができるのである。

3.2 整合的理解

これまでの考察により、アナロギアの整合的解釈の道筋が得られた。それを図式としてまとめると、以下のようなものになる。

アナロギア的名における異義性	アナロギア的名における共通性
<i>SS</i> ・概念に即す ・存在に即す ・概念と存在に即す	<i>SG</i> ・ <i>ST</i> ・一対多関係によって ・一対一関係によって <i>QV</i> ⇒ ・比の合致 ・比例性の合致

アナロギア的な名の異義性を強調しているのが *SS* の該当箇所であり、その他の著作の該当箇所は、共通性を強調しているものである。先ずそ

28) Thomas, *QV*, q. 2, a. 11, ad 4.

の点で、記述内容に相違があるのは至極当然のことである。そして SG と ST は、その説明内容がごく類似しており、それぞれアナログ的な名における共通性の在り方を「一对多関係」と「一对一関係」とで分類している。同じく共通性を述べる文脈でありながら、それら二つの著作とは説明内容を異にしていた QV の該当箇所は、神と被造物における「知」という、働きに由来する特殊なアナログ的な名が主題となっていたために、その説明方法がより厳密に、かつ限定的になっていた。しかし QV においても、「一对多関係」は神と被造物とにあてはまるアナログ的な名にはそぐわないことが確認されていたので、「比の合致」と「比例性の合致」はそれぞれ「一对一関係」における下位区分であると理解されるであろう。

結 語

以上までの検討内容より、トマスのアナログ概念に整合的解釈を余りがあることを示すことが出来たと思われる。要点となったことの一つは、アナログについて説明がなされている該当箇所を、そこだけで取り出すのではなく、文脈を踏まえた上で解釈することである。アナログは一義性の否定、純粋な異義性の否定、共通性をもたらす関係の多様性など説明項目が多岐にわたる。該当の文章が何を主題としているかを、常に注意深く確認することが必要であろう。

もう一つは、「比例性」についての理解と、その元となる意志的原因と結果との合致についての理解である。神は被造物を作出するものとして、被造物は創造主たる神の完全性を分有するものとして、両者は関係する。そうした原因と結果が「合致」するのはどのようにしてか、という場面で言われるのが「比例性」のアナログであり、それは単に作出因的因果関係によるのではなく、より厳密に述べるならば、意志的な作出因とその結果との間にある形相因的關係による合致なのであった。そしてそうした合致は、神と被造物との間に何らかの類似を我々が見出すがゆえに措定されるものである。実際トマスは以下のように述べる。

神が知恵あるものと言われるのは、知を作り出すということによるだけでなく、我々が知者である限りで、それによって我々が知者と

なるような神の力を、ある程度まで我々が模倣することによるのである²⁹⁾。

我々は作出因たる神には遠く及ばない結果であるので、作用者と同じ仕方であることはあり得ず、全くもって不完全な存在である。しかし卓越した存在である神の形相は、創造主の形相として、結果である被造物の形相のうち何らかの形で実現されている。そして我々がある事柄を本性に基づいて行う際、例えば人間であれば知性認識という働きを為すのであるが、それは形相を通じて行われる。ここにおいて、「我々が神の形相を模倣する」ということが生じるのであり、こうした模倣に基づく何らかの合致を説明するものが「比例性」なのである。その合致は我々が見出すものであるゆえに、神が被造物に類似しているとは決して言わず、むしろ被造物が神に類似していると言うのであって、このような被造物に端を発する神への合致は、被造の名（実際、「善」や「知」は我々被造物が用いる言葉である）を神に付す根拠ともなっている。まさにアナロギアとは、こうした形相的な模倣に基づく合致によって、神と被造物とを結びつけるものなのではないだろうか。

29) Thomas, SG I, cap. 31.